よみがえる文化財

美術品修復の現場から

□■4

文化財を現代に生かす

吉備国際大教授
臼井洋輔氏

文化財は知れば知るほど先人の英知が結まった「宝の山」です。人間の生き方に対しても大きなインパクトをもっている点でピュアで哲学的でもあります。文化財との対話を通し、少し視点を変えさえすれば、そこから泉のごとくあふれ出る先人の英知を聞き出せるのです。制作当初の思想や、美意識さえ知ることが出来るのです。

◆「修復」は発見のチャンス

当然のことですが、文化財を「修復する」というのは、固い秘密のベールを剥がす千載一遇のチャンスでもあります。これまでは、携わった職人が知っていただけかも知れません。あるいは気づくことなく覆い尻してしまって、未来永劫闇の中ということもあったはずです。しかし修理という場に、さまざまな研究者が連携して立ち会い、共同で技術を解明し、その秘密のベールをめくっていくとどうなるでしょうか？

非破壊で徹底的に当初の技法や素材をフィードバックして解明し、人間生活の向上のために還元しようということになれば、実に大きな展開が可能となります。そこから、より文化財というものを大切にしなければならないという保護運動にもつながり、修復方法に関しても、最高のものが見つかるはずです。そして何より、先人から私たちへ、そして次代へ永続性をもって確かな生き方を脈々とつなげていくことが出来ます。

◆異業種連携で広がる可能性

将来は文化財のあらゆる種類の修復技術者を吉備国際大の文化財総合研究センターと結んで、異業種の情報移動、伝達をスムーズに行えるようにしたいと思います。そこで蓄積されたものは、「文化技術史に関するデータ」と「文化財力」の結合で輝くものとなることでしょう。

生命科学であれ、天文学や宇宙工学であれ、時代のすう勢は共同研究にシフトしていることが分かります。それは崇高な理念を核とした上で、垣根を取り払って、機動性を持った大きなプロジェクトの運用によってのみ得られる成果があるからです。

改めて文化財に対して、その中に隠された英知を可能な限り掘り起こし、技術史的なもの、時代の変化と技術の関係、新技術として応用可能なものを考えるのです。さらに、アタックの仕方を広げ、改めて人間の技術とは、進化とは何か、何が技術を生ませていく原動力なのかを絶えず考え続けるのです。

修復の立場や過程で取り出す者、分析で徹底的に真実に迫る者、各資料間で対比させる者、国際的レベルで検討する者、それぞれ分担と一つの目標の中で、再統合を試みるのです。そうすると今まで誰も手をつけていない領域に、何かが浮かび上がるはずです。

岡山市大入保にある「鳴き岩」。石を一直線に切るには、ミシン縫穴のような矢穴に楔のくさびを打ち込み、水を掛けると、木が膨張して硬い石を割ることができる（石臼割技法）。桃山時代のハイテク技術だ

◆素晴らしき日本の文化

その国が世界の中で本当に尊敬されるということは、決して経済的に豊かであるとか、軍事力で他を圧倒しているとかではないのです。それは文化においてのみであるということを忘れないでほしいと思います。

日本は非常に素晴らしい先人の英知や考えを文化財という中にゆっくりとエッセンスのように結晶させてきた文化国家であったことを忘れてはなりません。日本の文化をひも解くことは日本のためだけではありません。不安と希望の間で揺れ動く人間はもとより、世界が無機質的に殺伐とすればするほど、人や社会をバランスを取りながら豊かにすることになるはずです。

お菓子のパックも、開封しやすいように石臼割技法と同じ技術が応用されている